我が街の記念碑 モニュメント 18

牛窪地蔵尊

渋谷区

【渋谷・内装・佐々木美由紀記】甲州街道と中野通りが交差するビルの谷間に、三角のお堂があります。お堂には1711年に建立された地蔵様が祀られ、右手前には青面金剛と三猿が刻まれた「庚申塔」（1724年）が建てられ、「交通事故遭難慰霊碑」（1960年）は、道路自体を供養することから、全国でも珍しいとされる「道供養塔」があります。

最近はパワースポットとしても人気

SNSで人気の身代わり地蔵
供養で事故がピタリ

元々の地蔵尊は甲州街道に対して東向きに、道供養塔は甲州街道に面して立てられていましたが、オリンピックを機に行なわれた甲州街道の道路拡張に伴い、18mもの後退を余儀なくされました。しかし、御祓いせずに移転したところ、交差点で交通事故が多発し、多数の犠牲者が出るようになってしまいました。そこで改めてご供養したところ、誰もが驚くほど、交通事故がピタリと収まったのです。

牛窪地蔵尊とは、この地は極悪人の刑場として牛を使って最も厳しい牛裂きの刑という両足から股を引き裂く酷刑場の地であったと伝えられています。この牛と窪地であったことから牛窪の地名となり牛窪の地名と共に幡ヶ谷地方の雨乞行事の場所としても有名でした。正徳年間にこの地に悪疫病がはやり、これが罪人怨霊の祟りだと伝えられ子どもの安泰を守り、苦難の時の身代わり地蔵としてこの淋しい土地に地蔵尊を祭り霊を慰めたのです。

笹塚、幡ヶ谷、本町付近はたくさんのお地蔵様や庚申塔があり、由来や伝説など調べてみたら面白いと思います。

最近、牛窪地蔵はパワースポットとしてSNSで人気とのことですよ。

ヤングさま

一喝

ウッドストック・フェスティバルの翌1970年、イギリスのワイト島でそれを遥かに凌ぐ史上最大規模のフェスが開催された。

65万人を動員したこの巨大音楽フェスには、ジミヘンやザ・フー、ドアーズなど、錚々たる顔ぶれが参加。観客の一部が暴徒化し、ヤジとブーイングで騒然とする中、まだ20代のジョニ・ミッチェルはライブの途中、「もう少し敬意を払って」と叫ぶ。すると会場は水を打ったように静まり返った。

忘れえぬこと

ドジョウと兎が蛋白源
松本での疎開生活

塗装　安藤 慎一

終戦間際から戦後の小学生時代、長野県松本市での長い疎開生活がどうしても忘れられない。3歳位の時、薄暗く長い廊下のある母の実家へ。納屋を改造した仮の我が家に辿り着いたことを覚えている。

松本での生活で一番参ったのは冬の寒さ。ある日、タンスの上の赤チンのビンが冬の寒さで中身が凍り、ビンが割れてタンスと下のゴザを真っ赤にしたことがあった。

唯一の楽しみは、進駐軍の払い下げの品。粉ミルク、メリケン粉、砂糖そしてコンビーフの缶詰が段ボールや20リットルのクラフト缶でドサッと届く。一日だけ贅沢ができたが、残りの配給物はみな米や野菜に変わってしまった。

春から秋が一番楽しかった。特に夏は毎日ドジョウ取り、竹で編んだ「ド」という円筒形の罠を夕方川に仕掛け、翌朝、罠を取りに行きながらあぜ道の草を刈りウサギを育てた（ウサギは大きくなると自分たちの腹に収まった）。獲ってきたドジョウは2、3日泥を吐かせ、私たちの貴重なタンパク源となった。

また小学一年生の頃になると、どこの農家でもそうだが5月の中頃から田んぼの手伝いに駆り出された。農繁期になると、学校も田植え休みとして数日間の休日を設けた。田起こしから田植え、草取りや稲刈りまでいろいろ手伝わされた。おかげで米粒が人の口に入るまでの行程が勉強できた。

疎開生活から池袋の自宅に戻って70年。いつも腹を空かせていた松本での生活が、小さい頃の思い出ながら今でも鮮明に思い出される。（豊島）

詰将棋

持駒 金 桂

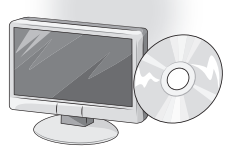
6	5	4	3	2	1	
						一
		香		桂	香	二
				王		三
			馬			四
					角	五
						六

チョット一服（994）

春風亭昇太が結婚すると発表した。還暦までに間に合ったと話し、笑点のメンバーからも祝福された。昇太は独身キャラで笑いを誘っていたが、「僕がいないとき掃除をしてくれる」と、ルンバが奥さんだと言ったため、女は家で掃除をする機械ではないと女性の反感を買っていた。

結婚しないから少子化が進むといった非婚者への非難には、結婚は個人の自由だとする批判が返るだろう。しかし結婚したい相手がいても、家庭を持つための収入がないという人も大勢いる。昇太にはおめでとうと言いたいが、結婚出来る条件を社会が整えることが必要なのではないか。

DVDブルーレイ



ロボット

監督　シャンカール

多様性が生んだ印度風ごった煮映画

8年連続で人口減少が続く日本だが、お隣中国では今年人口が14億人を突破するのではと話題になっている。しかし、一人っ子政策の影響などで、将来的には人口減少になるとのこと。

そこで次に人口世界一になると言われているのがインド。昨年末の約13億5000万人が、衛生・医療環境などの向上につれ新生児死亡率が減少、平均寿命も伸びてあと10年ほどで15億人を突破するんだとか。

そんなインドだが、年間映画製作1000本以上で映画館観客総数も世界一の映画超大国としても有名だ。『ロボット』は2010年、インド映画としては破格の37億円を投じて製作された、シャンカール監督によるSFアクションコメディー映画。日本でも第24回東京国際映画祭で上映後、2012年に劇場公開された。

天才科学者・バシー博士は、10年かけて自分にそっくりの高性能ロボット・チッティを作り上げた。あらゆる知識を吸収するチッティだが、人間の感情をも理解するようプログラムされ、バシー博士の恋人サナを恋愛対象として認識し始め…。

3時間近くもある大作で、アクション・メロドラマ・コメディなど雑多な要素がてんこ盛りな上に、歌とダンスも十二分にちりばめられている。インドではみな席から離れて大声を上げて踊りながら鑑賞するのが一般的で、どの映画にも歌って踊るミュージカルの場面は欠かせないのだ。

あれもこれも詰め込み過ぎの感が否めないが、数百の言語と超多様な文化が混在するお国柄の映画らしく、すべてを受け止めて観れば、楽しい3時間を過ごせる作品だ。